

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2018 祐成 保志

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



2018/9/26 東京大学朝日講座「『居場所』の未来」

退却の作法

祐成 保志

(東京大学文学部・社会学)

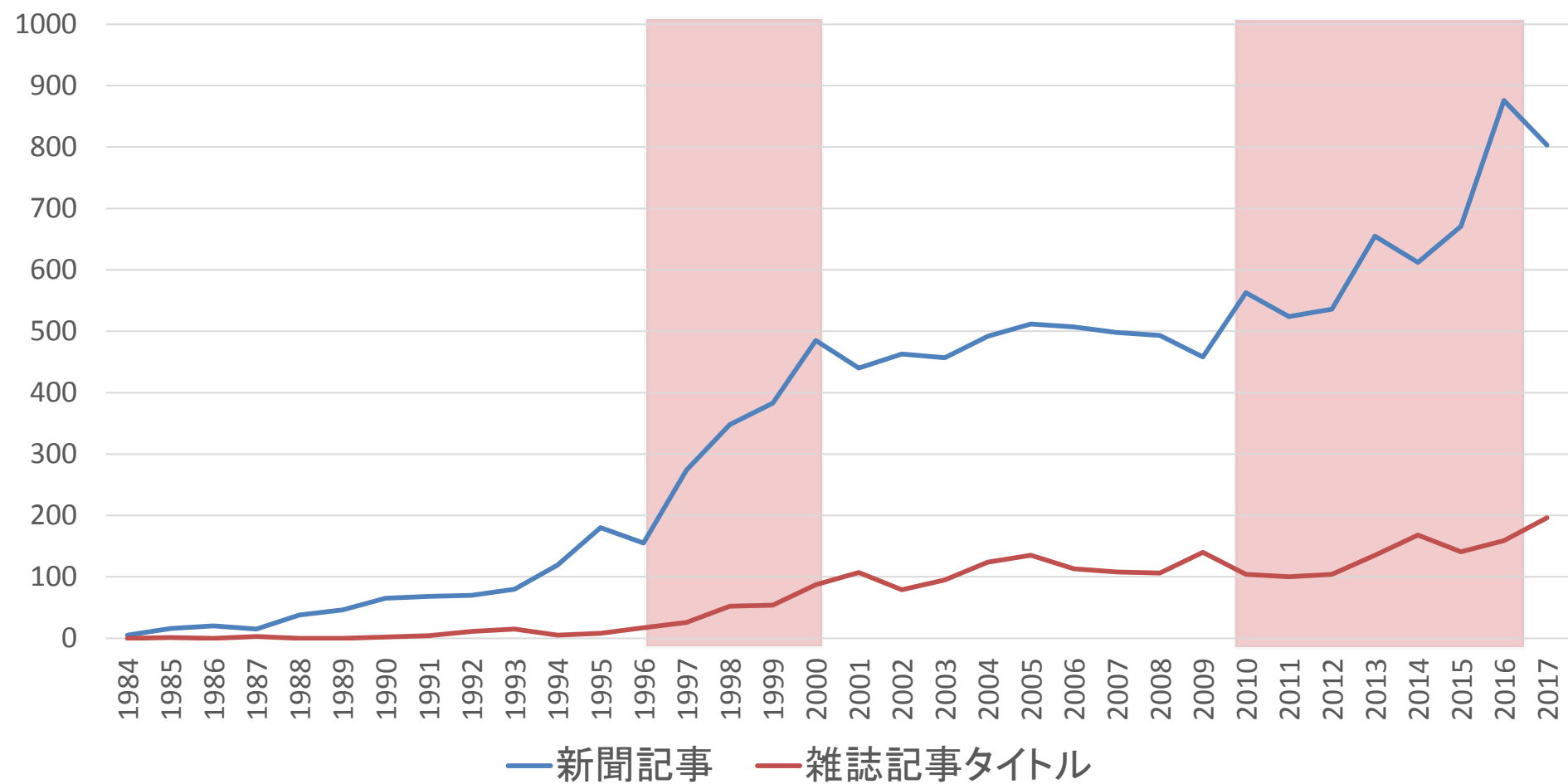
sukenari@l.u-Tokyo.ac.jp

今年度のテーマについて

- 安心して過ごすことのできる居場所があることは、生きるための基本的な条件です
- 一面で、現代社会では、かつてなく居場所を見つけることが容易になったと言えるでしょう
- その一方で、居場所の欠如や喪失の感覚が深まり、これを取り戻すための努力が静かに広がりつつあるのも現代の特徴ではないでしょうか

今年度のテーマについて

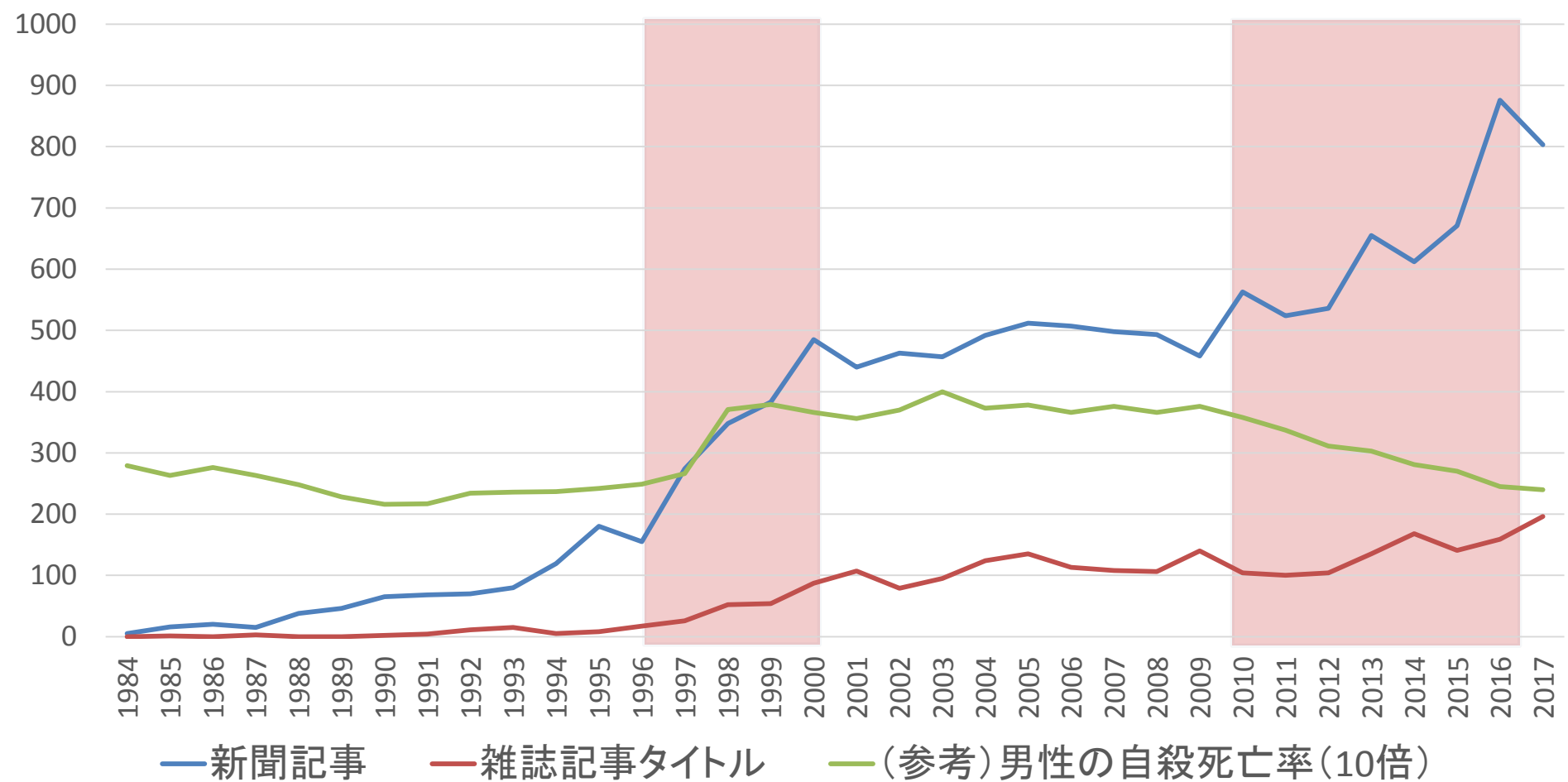
新聞記事・雑誌記事タイトルでの「居場所」の登場回数



- 新聞記事 朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」による
- 雑誌記事 国立国会図書館オンライン雑誌記事検索による

今年度のテーマについて

新聞記事・雑誌記事タイトルでの「居場所」の登場回数



- 新聞記事
 - 雑誌記事タイトル
 - (参考) 男性の自殺死亡率(10倍)
- 新聞記事 朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」による
 - 雑誌記事 国立国会図書館オンライン雑誌記事検索による
 - 自殺死亡率 『平成30年度版自殺対策白書』第1章より

今年度のテーマについて

- もっとも、**居場所への渴望**ないしは**衝動**は、それをつくったり維持したりすることを妨げるものへの**無関心**や、ときには**敵意**にまでつながるのかもしれませんが
- 本年度の朝日講座では、こうした矛盾に注意を払いつつ、見えるものと見えないもの、そして、身近なコミュニティと宇宙のスケールの間を行き来しながら、私たちの居場所とその未来について考えたいと思います

第1回「退却の作法」概要

- バンキング・オン・ハウジング
 - 金庫としての住宅
- 脱商品化
 - 社会権、DIY、固有性
- 雇用以外の働き方
 - 日常生活の政治
- 住居の意味
 - 「ルーフ」と「ルーツ」
- 居住を保障する
 - 資産の再分配

バンキング・オン・ハウジング

- 昨年、政治学者スチュアート・ローによる『The Housing Debate』(2011年)の邦訳を、『イギリスはいかにして持ち家社会となったか』(2017年、ミネルヴァ書房)と題して刊行した
- イギリスの住宅政策史をひもときながら住宅と社会の複合的な関係を論じた同書にとって、核となるキーワードが、「**バンキング・オン・ハウジング**」

著作権等の都合により、ここに挿入されていた画像を削除しました。

書籍表紙画像

スチュアート・ロー 著、
祐成保志 訳『イギリスはいかにして持ち家社会となったか』
ミネルヴァ書房、2017年。

<http://www.minervashobo.co.jp/book/b285596.html>

バンキング・オン・ハウジング

- bank on: 「頼りにする」「あてにする」
 - 多額の支出(医療費や教育費など)が必要な時、住宅という現物資産を現金化して対処すること
- 住宅そのものを売却するのではなく、住宅のエクイティを担保に、新たに借金をする。
 - エクイティ: 市場価値から住宅ローン債務を差し引いた実質価値
 - 自宅に住み続けながら、その仮想的な転売可能性を現金化するところに、バンキング・オン・ハウジングの核心がある
- これを成り立たせるのは、「金融化(financialization)」の技術
 - 金融化: 商品価値を評価しリスクを管理する
 - 住宅という日常に密着した財が、金融技術を介してグローバルな市場に接続される

アセット・ベース型福祉

- 「金融化」によって、福祉ニーズの自力調達が容易となった
 - その結果、政府と個人の関係は変化する
- 「アセット・ベース型福祉 (asset-based welfare)」
 - 政府は現物資産(持ち家など)の取得を奨励する
 - 個人は、現物資産から、必要に合わせて現金を引き出す
 - 政府は福祉支出を抑制する
- 個人資産をあてにした福祉国家の再編成
 - サブプライム・ローン問題(2007年)に端を発する金融危機によって頓挫するかに見えたが、依然として金融化の勢いは衰えることがない

住宅の地域差

OECD諸国の住宅所有形態(2009年)

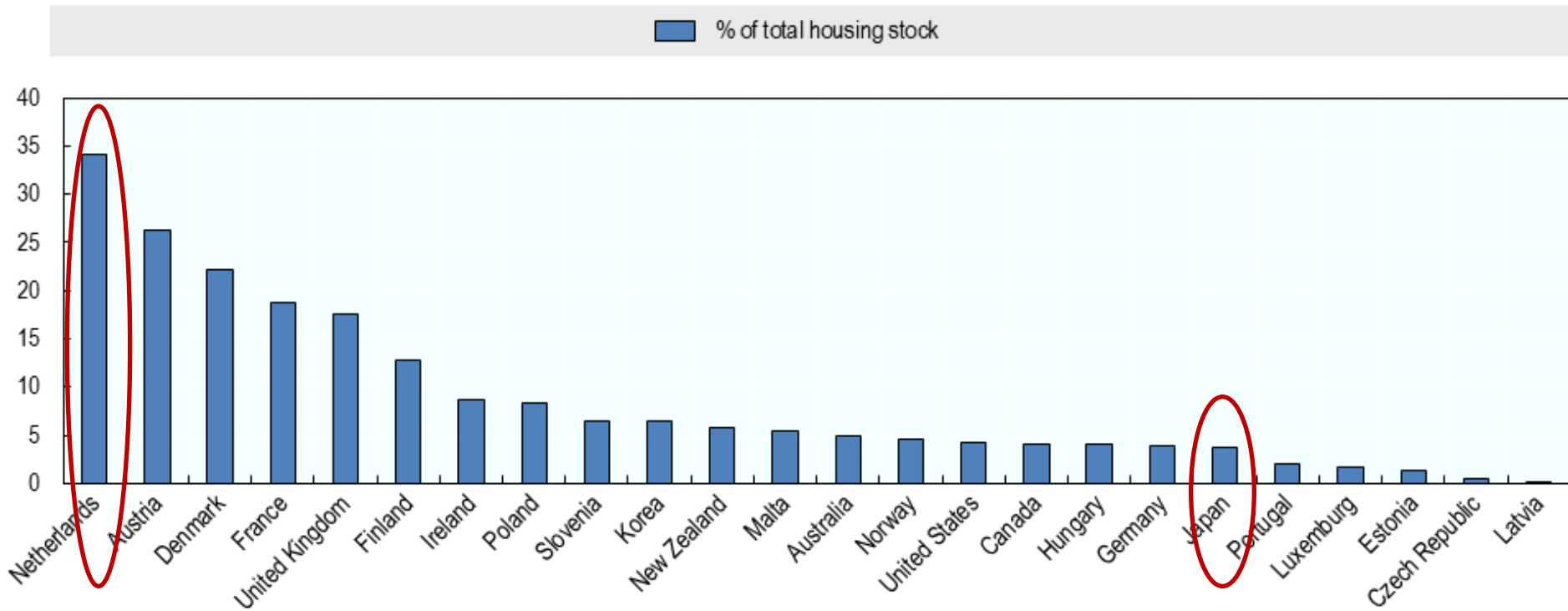
著作権等の都合により、ここに挿入されていた表を削除しました。

Andrews, D., A. Caldera Sánchez and Å. Johansson (2011), “Housing Markets and Structural Policies in OECD Countries”, *OECD Economics Department Working Papers*, No. 836, OECD Publishing.

doi: 10.1787/5kgk8t2k9vf3-en

住宅の地域差

全住宅ストックに占める社会賃貸住宅の割合
(2015年までの最新データ)



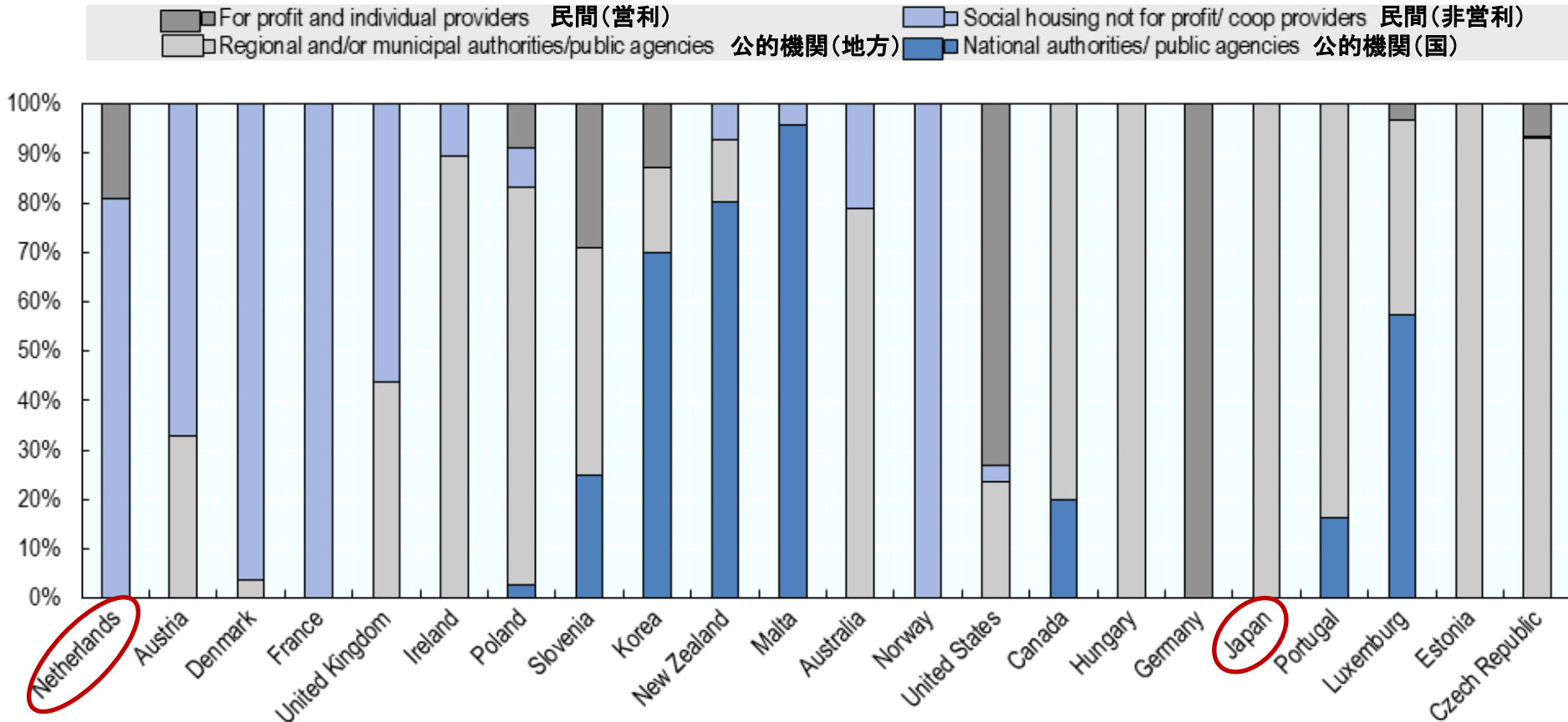
<http://www.oecd.org/els/family/PH4-2-Social-rental-housing-stock.pdf> 最終閲覧日:20181021

OECDアフォーダブル住宅データベース

<http://www.oecd.org/social/affordable-housing-database.htm>

住宅の地域差

社会賃貸住宅の供給主体
(2015年までの最新データ)



<http://www.oecd.org/els/family/PH4-2-Social-rental-housing-stock.pdf> 最終閲覧日:20181021

OECDアフォーダブル住宅データベース

<http://www.oecd.org/social/affordable-housing-database.htm>

持ち家社会の拡大？

- 賃貸住宅が優勢だった国々でも、いまや持ち家が主流になりつつある(Lowe 2011=2017)
 - たとえばオランダは、民間非営利組織が供給する社会住宅のストックが厚く、持ち家は少数派だった
 - 1990年代半ばから持ち家率が急上昇し、過半数を占めるに至った
 - 持ち家取得の支援、金融市場の開放、住宅価格の高騰、住宅ローン債務の増大など、「金融化」の先進地に
- 持ち家率は住宅の制度を比較するための便利な指標であるが、粗い指標でもある
 - 持ち家率の高さは、必ずしも金融化の浸透を意味しない
 - イタリア: 持ち家が住宅の大半を占めているが、多くの不動産は住宅市場には出回らず、転売も困難
 - ロシア: 「市場なきプライベート・ハウジング」(Lowe 2011=2017: 212)

住宅と市場との関係

- 持ち家率という数字よりも重要なのは、その背後にある、市場と住宅との関係

未商品化 まだ市場に出ていない

商品化 市場で取引される

脱商品化 市場の外に出る

再商品化 再び市場で取引される

住宅と市場との関係－歴史的な変化

- 市場が未整備なまま持ち家が優勢＝「未商品化」
 - － 住宅は自らつくるもの、親族から継承するもの
- 市場が整ってくると、「商品化」の局面を迎える
 - － 住宅の生産者と消費者がはっきりと分かれる
 - － 住宅の商品化が進むと、まず賃貸住宅が増える
 - － 長期雇用、住宅ローンの普及により、「持ち家という商品」が確立
- 政府の介入による「脱商品化」
 - － 住宅を切実に必要としつつ、市場で住宅を入手できない人に照準
- 金融化を通じた「再商品化」
 - － 住宅の潜在的な価値を、商品として流通させる
 - － 政府の力によって脱商品化された住宅を、再び市場に呼び戻す

「脱商品化」とは？①社会権

- 財やサービスを、市場における購買力ではなく必要度に応じて分配すること
 - 公営住宅、住宅扶助、福祉施設など
 - 困窮の度合い(必要度)を公的機関・専門家が判定する
- 住宅の借り手の権利を保護する
 - 借家法
 - 家賃統制
 - 米国の公正住宅法(1968)

「脱商品化」とは？②DIY

- それまでは市場で購入されていた財・サービスが、自作されるようになること
 - 可処分所得の減少、労働コストの増大に対処するための窮余の策
 - 「住民や実業家やその親戚、友人の中にたまたま石工、電気工、大工、請負業者のような建設業に携わっている人がたくさんいたのです。こういった人びとがサービスを無料で提供したり、またあるときは物々交換で提供したりすることにより、ノースエンドの建物を近代化し、改修したのです。……つまりノースエンドは銀行システム以前に働いていた、物々交換と蓄積という原始的方法に戻ったのです」(ジェイン・ジェイコブズ, 1961=2010, 『アメリカ大都市の死と生』, p.325)
- 自作化が、独自の価値を有するライフスタイルとして、あえて選択されることもある
 - 集合的(collective)な自作

「脱商品化」とは？③固有性

- 市場で交換されていた商品が、それらを購入した人や使う人にとって**かけがえのないもの**となること
 - 初めはありふれた商品であっても、使い込んでいくうちに、利用者になじんでゆく
 - 他人には共感されないかもしれないが、本人にとっては代替がきかない価値をもつ
 - ときには、**象徴的な意味**が与えられ、「聖なるもの」として扱われる
- 規模、複雑さ、耐久性などにより、住宅においては、そうした変化が生じやすい

『Divisions of Labour(分業論)』

- 脱商品化の3つの様相のうち、ここでは「自作化」に着目する
- 手がかりとするのは、イギリスの社会学者R・パールが1984年に発表した『Divisions of Labour(分業論)』
 - テムズ川の河口にある、人口3万人ほどのシェピー島がフィールド
 - 歴史文書の分析、ライフヒストリー、大規模計量調査など、複数の手法を駆使して地域社会の構造と世帯の生存戦略を描き出した濃密なエスノグラフィ(民族誌)
 - 現代社会における自作化についての先駆的な研究
 - 近年の再評価(Crow, G. ed., 2017, *Revisiting Divisions of Labour*, Manchester Univ. Press)

著作権等の都合により、ここに挿入されていた画像を削除しました。

書籍表紙画像

R.E.Pahl 著、『Divisions of Labour』Oxford : Blackwell、1984年。

<https://www.amazon.com/Divisions-Labour-R-Pahl/dp/0631132740>

『Divisions of Labour(分業論)』

- 30数年前の外国の研究に着目するのは、社会の縮退が何をもたらすかを克明に記録しているから
 - 雇用が不安定化し、政府の財政危機によって福祉も削減されるなかで、**どう生き抜くのか**？
- 縮退の過程では、「**どこに住むか**」「**いかに住むか**」が重大な関心事となる
 - どの地域が存続し、消滅するかが選別される
 - その帰趨が、狭い意味での働き方を超えた人生の時間の使い方に重大な影響を及ぼす

雇用以外の働き方

- 「さまざまな働き方 (all forms of work)」
 - 「働き方」の概念を広げる
 - 雇われて賃金を受け取るフォーマルな働き方に限定されない
- 雇用労働に対する評価
 - 製造業を中心に経済成長を謳歌し、福祉国家が整備されたイギリスの1950～60年代は「古き良き時代」として描かれるのが通例
 - 『分業論』が書かれた1980年代初頭は、産業の空洞化や財政難に苦しむ時期は、「失われた時代」として嘆きの対象であった
 - しかしパールは、あの「古き良き時代」こそ、雇用労働への過度の依存により、かつてなく人びとの生存能力が脆弱化した、「失われた時代」だったのではないかと問いかける

能力剥奪の時代

- 「これほどよい時代はいまだかつてなかったと言われた第二次大戦後の復興期は、いまにして思えば、**能力剥奪の時代**であった。」
- 「**ごちゃごちゃした裏通り**は、そうと気づかれないうちに小さな仕事場の基盤を提供していたのだが、スラム・クリアランスのあおりで叩き潰されてしまった。工場は建て替えられ、合理化された。」
- 「労働組合の力が強くなり、組合員たちは、集団的連帯行動こそが、上昇する収入のエスカレーターに乗りつづけ、安定した地位を確保することにつながると信じこまされた。男たちは家族から引っこ抜かれた。……**超過勤務が「獲得」されたときは、勝利であると見なされた。**」
- 「働くこととは工場で雇用されることであると信じる、視野の狭い家族は、まさに1950～60年代の雇い主が最も強く求めたものであった。彼らは、産業資本主義の時間と労働の規律によって完全に社会化された。こうして彼らは、おそらく英国史上初めて、**働くことについての家族の戦略と、それにもとづく生存の手段を失ったのである。**」

(Pahl, 1984: 56-57)

- 雇用の縮小は、地域が働き手を取り戻し、人びとが能力を回復する機会？

なぜ自作に打ち込むのか

- 自作化の促進要因として、パールは4つの変化を挙げる
 1. 公共部門の私有化(民営化)
 2. 家族によるサービス生産(セルフサービス)の増大
 3. 自作による楽しみや充実感を求める傾向
 4. 脅威に満ちた世界の中で、自分で見わたせる小さな範囲だけはコントロールしたいという願望

なぜ自作に打ち込むのか

- 不安定な世界のなかの拠り所

- 「あたかも荒れ狂い、制御不能であるかのような環境から身を守るため、家族は自らのうちに**退却**する。これと歩調を合わせるように、地域もまた、より**内向き**になるのかもしれない」(p.197)
- 「自宅は、まさにわれわれのパーソナル・アイデンティティの感覚にとって主要な**拠り所**をもたらし、それゆえに、われわれの生活の質の基本的な評価基準となる」(Pahl, R.E., 1988, Housing, Work and Life Style, *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, 80(2), p.79.)

- 上昇移動のための足がかり

- 住宅のリノベーションに多大な労力を投入するのは、近しい人びととの間で共有される象徴的な価値を高めるだけでなく、ローカルな住宅市場で評価される**交換価値**を高めるから
- 「不動産価値を増大させ、資産売却益を得て徐々に**住宅市場を上昇移動**し、資本を獲得する」ための戦術でもある(Pahl, R.E., 1984, *Divisions of Labour*, Basil Blackwell, p. 183.)

もうひとつの政治

- 同時代の多くの社会学者・政治学者たちは、私生活に没頭して政治に背を向ける人びとを批判
- パールは、人びとがなぜ住居に「退却」するのかを、より内在的に解明しようとした
 - 「広範な政治的争点について、多くの人びとの関心を引きつけるのは困難であり、地方選挙と全国選挙の投票率はきわめて低かった。これは、人びとが**自宅の改修や改善、そして引っ越しの計画を立てる時の熱意**とは、まったく対照的である。私は、こうした日常的生活実践への取り組みこそが、本質的に政治的な活動であると考えている。.....どこに住んでいるか、という目に見える記号は、どこに雇われているかよりもずっと重要である。」(p.327)

もうひとつの政治

- 人びとは、フォーマルな政治に無関心であるにすぎない
 - 住居を拠点とする日常生活において、自らのワークの配分を通じて、もうひとつの、そして効果を実感できる政治に積極的に参入している
- **住宅を介した格差拡大のメカニズム**
 - 日常生活の政治の原動力
 - 持ち家は、失業や収入の減少に対する**保険**として機能し、たとえ労働市場で失敗しても、ローカルな住宅市場で挽回できる余地がある
 - 他方で、住宅というバッファーを持たない家族においては、労働市場での失敗が貧困に直結する
 - それゆえに、人びとは住居に真剣に向かい合わざるを得ない

分離から混在へ？

- 日本社会で、「住居の政治」はどれほどのリアリティをもつか
 - 私たちは依然として、「どこに雇われているか」にこだわり、もっぱら「職場の政治」に翻弄されているようにも見える
 - しかし、働き方と住まい方の境界が揺らぎ始めている
 - 副業や兼業という働き方の変化、セルフリノベやシェアリング、多拠点居住という住まい方の変化が同時に生じているのは、その徴候？
- 職と住の分離から混在へ？
 - 「インフォーマルなもの、パーソナルなもの、小規模なもの、そしていくらか法を逸脱したものがより重要になる」(p.7)
 - 「さまざまな形態のインフォーマルでコミュニアルなワークを組織化しようとする、地域の取り組み」(p.197)

居住(住むこと)とは？

- 主体性の休止
 - 睡眠・休息
- 環境の対象化
 - 環境に対する働きかけ
- 自己の対象化
 - 環境に合わせて自分を変える

居住（住むこと）＝「眠ること」

- 住まいでは、人は眠ったり、休んだり、**とくに目的もなく**佇んだりしている
 - 睡眠と休息は、住まいの働きのなかで最も重要なもの
- 居住とは、守られた場所のなかで緊張を解いた状態を指す
 - そのとき人は、能動的な主体ではなく、住まいに体を預けている

居住(住むこと) = 「作ること」

- 他方で、居住は、環境のなかに境界を設け、他者に対して自らの住まいであると主張することでもある
 - その境界を、隣接する他者との対立や協力を通じて維持し、安心や快適を感じられる場として整えること
 - たんに環境に身を任せるだけでなく、環境を改変し、つくり出す、**能動的・創造的な側面**をもっている
- 居住という行為は、自分の外にある環境だけでなく、自分自身にも向かう
 - 居住は、環境を利用したり改変したりするだけでなく、**自分を環境に馴染ませる**過程でもある
 - この意味で、住む人に合わせて住まいがつくられるだけでなく、人は住まいに合わせて自らをつくる

居住(住むこと) = 「蓄えること」

- 住むことは、住宅という商品の、受動的で個別的な消費にとどまらない
 - 環境と身体に働きかける能動的な行為
 - 世帯・世代をこえた住まいの**共同的な生産**
 - 金銭、労力、感情の**投資**
- 価値の貯蔵庫としての住宅
 - 投資は、建物や設備というモノ、または、経験や知識という無形の資産として貯えられる
 - 蓄積に時間がかかるが、**長期間にわたって**引き出すことができる
 - その**喪失が与えるダメージ**が大きく、しばしば測定が困難

“Home”の意味

典型的な表現	一般的な意味	安心感	自己との関係
「逃げ場」	物資の充足	身体的	防護
「だんらん」	暖かさ	生理的	くつろぎ
「こころ」	愛情	感情的	幸福
「プライバシー」	制御・管理	なわばり	占有
「ルーツ」	自己の一貫性の 確認	存在論的	有意味感
「住所」	場所	空間的	安定
「楽園」	理想	精神的	至福

Somerville, Peter, 1992, “Homelessness and the Meaning of Home: Rooflessness or Rootlessness?”, *International Journal of Urban and Regional Research*, 16 (4)より

“Homelessness”の意味

典型的な表現	一般的な意味	不安感	自己との関係
逃げ場のなさ	物資の欠如	身体的	無防備
寄る辺のなさ	冷たさ	生理的	ストレス
無情	冷淡	感情的	悲惨
プライバシーの欠如	無力	なわばり	監視
根無し草	疎外感	存在論的	意味喪失
住所不定	没場所性	空間的	不安定
「煉獄」	理想	精神的	苦難

Somerville, Peter, 1992, “Homelessness and the Meaning of Home: Rooflessness or Rootlessness?”, *International Journal of Urban and Regional Research*, 16 (4)より

「ルーフ」と「ルーツ」

- ルーフ (roof)
 - 雨露を防ぐ **屋根** があること
- ルーツ (roots)
 - その場所に **根** をおろすこと

- ルーフレス (roofless)
 - 寝泊まりできる場所が無い状態 = 「宿なし」
- ルートレス (rootless)
 - 社会に居場所が無い状態 = 「根なし」

居住をいかに保障するか

- 「バンキング・オン・ハウジング」の由来
 - 『分業論』からは、「バンキング・オン・ハウジング」という態度が、2000年代に突如として出現したのではなく、社会に深く根を張ったものであることがわかる
 - この認識のもとで、「アセット・ベース型福祉」の概念を、**居住をいかに保障するか**、という問いとして再定義できる
- 「アセット・ベース型福祉」の再検討
 - アメリカの社会福祉学者マイケル・シャラーデンが提唱 (Sherraden, M., 1991, *Assets and the Poor*, M.E. Sharpe.)
 - 所得保障(給付金や手当)に偏った「インカム・ベース型」の福祉政策を批判し、**資産の形成と所有**を重視した

居住をいかに保障するか

- アセット・ベース型の発想

- アメリカ政府がミドルクラスに対して強かに押し進めてきた、持ち家取得をはじめとする資産形成の支援を、貧困層まで拡大すること
- 開発途上国の援助実践の中で培われた手法を、先進国の貧困対策に導入する試みでもある

- 「資産」の再分配

- インカム・ベース型／アセット・ベース型の際立った違いは、制度の利用者像(消費者／生産者)、時間的な射程(短い／長い)にある
- 両面が保障されてこそ、居住の保障といえる
- インカム・ベース型が「**所得**」の再分配をめざすとするれば、アセット・ベース型は「**資産**」の再分配をめざす

後ろ向きの前進／前向きな退却

- 「我々は後ずさりしながら未来に入っていくのです」

(ポール・ヴァレリー, 1936=2010, 「我らが至高善「精神」の政策」『精神の危機』岩波文庫, p.156)

- 「つまるところ、**前日あるいは前々日のデータ**をもとに予測することが段々無益なことになり、あるいは危険なことにすらなっているのだ。ただ、あらゆる事態の出現、まずどんなことが起こっても驚かないように心の準備をしておくことは賢明であろう。」(p.157)
- 「**心の中、精神の裡**に、明晰性への意志、しっかりした知性の働きを保っておかなければならないし、人類が史上初めて初期の自然状態から逸脱して、そこにはいくらか行き過ぎがあるようにも思われるが、どこへ行くとも知れずに足を踏み入れた未曾有の冒険、その冒険の偉大さと危険さについてきちんとした意識を持っていなければならぬだろう。」(p.157)

課題

- 本講座の説明文は、次のように述べている
 - ①「かつてなく居場所を見つけることが容易になった」
 - ②「居場所の欠如や喪失の感覚が深まり、これを取り戻すための努力が静かに広がりつつある」
- ①と②の具体的な例を挙げ、なぜそうした変化が生じたのか、また、両者にはどのような関係があるのかを考察し、ITC-LMSで提出しなさい